第２章　京大病院遺跡 AH17 区の発掘調査

泉拓良

昭和51年８月，当時は周知の遺跡でなかった医学部附属病院 RI 診療棟予定地において，旧外科南病舎撤去前に工事の支障となる埋設物調査に立合い，平安後期の巴文軒丸瓦を包含する土層を検出した。この立合調査に基づき，すでに建物と共同溝によって遺跡が破壊された地域を除いて，発掘区を設定した。発掘区は底辺 8m 高さ 48m の細長い直角三角形を呈している(図版１-34)。表土層と建物の基礎を機械で排除し，それより下は単純な層序ではなかったため，遺構を検出した面で分けながら発掘を進めた。遺構の正確な位置，方位を記録するために，構内座標を実測の基準に使用した(図版２)。

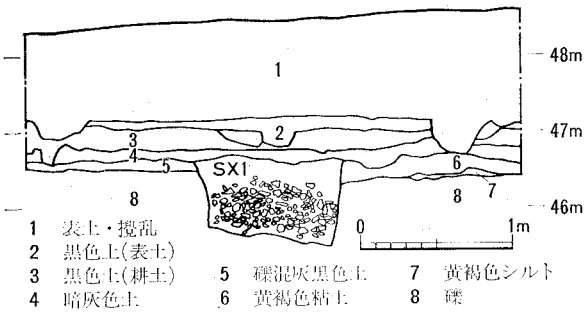
１　層　位

発掘区は標高約 48.5m のゆるやかに南西方向に傾斜する，高野川の扇状地である。比較的残りのよい発掘区の東端では，層位は上から表土・盛土層，黒色土層，暗灰色土層，灰黒色土層，黄褐色~~砂質~~粘土層で，その下は無遺物の黄色シルトもしくは礫層となる(第２図)。そのほかの地域では，無遺物層まで現代の攪乱や江戸時代の削平を受けている所が多く，各堆積土が層をなさず，ブロック状に点在していた。発掘区中央の西では暗灰色土層の下に東壁の層位にはない暗褐色砂質土層がある。各層が形成された年代は，黒色土層が江戸末～明治時代，暗灰色土層は江戸後期，暗褐色砂質土層が江戸中期頃，黄褐色砂質土層が平安末～鎌倉時代である。

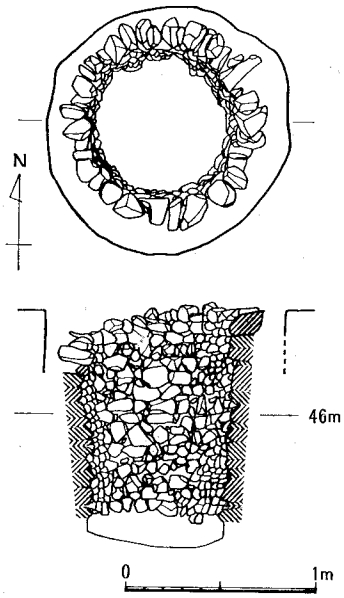
２　遺　構

現代の攪乱と近世の削平によって当時の生活面が破壊されているために，遺構相互の関係を面として把握できなかった。以下時代別に整理して記述する。

江戸末～明治時代　　おもな遺構は埋土が黒色土で，１辺約 15cm の方形，または直径約 15 cm の円形の掘形をもつ掘立柱列 SA1～10(図版２-上，図版３)で，１スパン約 2.4m の東西方



第２図　発掘区東壁の層位



第3図　井戸 SE1 平面と側面断

向に1列に並ぶ柵列である。南北2群に大別でき，その間隔は約3mである。方位は約4度東へ振り，京大病院遺跡 AE15区で検出した柵列 SA301～349〔京大埋文年報77図版65〕と同じ方位である。この柵列は畑作と関係するものであろう。

江戸後期　集石遺構と，埋土が暗青色の溝とがおもな遺構である(図版2-下)。集石遺構 SX1～6は，すべて掘形の中に礫を隙間なく詰めたもの。SX1は1.8m×2m強の隅丸方形で深さ約1m，SX2は長径2.3m，短径1.8mの楕円形で深さ約0.7m，SX3は1.5m×3.2mの長方形で深さ約0.3m，SX4（図版4-1）は2m×1.3mの長方形で深さ約0.4m，SX5(図版4-1）は1辺が0.8mの正方形で深さ約0.3m，SX6は長径3m，短径1mの楕円形で深さ約0.4mである。同様の遺構が京大病院遺跡 AE15区で出土している〔京大埋文年報77 p. 50〕。遺構の性格は不明である。

溝 SD1は幅40cmで深さ30cmの断面がU字形の東西溝。西へいくほど底が低くなる。方位は約4度東へ振る。埋土は暗青色粘質土で，土師器や陶磁器，貝殻を多量に含んでいる。SX4･5から西へ約5mほどで消滅してしまう。

江戸中期頃の遺構　方形の落ち込みと，その底で検出した井戸があたる。その埋土である暗褐色砂質土層を，江戸後期の SX4･5と SD1が切っている(図版2-下)。

方形の落ち込みは，残っている1辺が約12mで，深さは約0.3m，南側は建物の基礎で破壊されているのでその規模は判明しなかった。性格も不明である。井戸 SE1は方形の落ち込みの北端中央部で検出した円形の石組み井戸である(第3図，図版~~3~~4-2)。掘形の直径1.5m，石組みの内径は0.8mで，深さは1.3m。拳大の河原石を積み上げて作っている。検出面近くまで細かい礫が，土をほとんど混じえずに詰っていて(図版~~3~~4-3)，完形の塑像の地蔵菩薩像1体がその中に埋まっていた。したがって意図的に井戸を埋めたものと推測する。残存状況からみて，方形の落ち込みに伴なう井戸と考えている。

平安末～鎌倉時代　明確な遺構は，埋土が黄褐色砂質土の溝だけであった。溝 SD2(第4図，図版2-下)は幅約1m，深さ約0.4mの南北方向の溝で，南側は江戸中期頃の

方形の落ち込みによって切られ，残っているのは約2mだけである。埋土の上半分には細かい礫が多くあり，下半分では黄褐色砂質土に礫が混じらない。平安後期の巴文軒丸瓦1点が出土している。京大病院遺跡AE15区で検出した同様の埋土をもつ溝SD108が平安末～鎌倉時代のものである〔京大埋文年報77 p. 47〕ことから，瓦の年代と合わせて平安末～鎌倉時代と推定した。

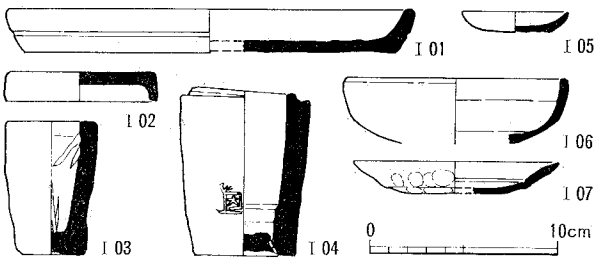
第4図　溝SD2上面の礫群

3　遺　物

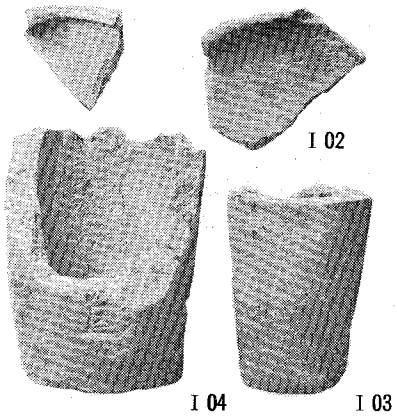
出土した遺物はコンテナ(60×40×15cm)に20箱で，すべて平安後期以後である。そのうち江戸時代の遺物が大半を占める。完形品，大型の破片が多いのは，溝SD1と暗灰色土層で，ともに江戸後期である。

土師器　　皿，小盤，塩壺などがある。皿は直径15cm以上の大型，9～12cmの中型，4～6cmの小型に3分できる。中型の皿の多くは見込み周縁に篦描き沈線を施すものである(第5図Ⅰ07，図版5)。小型の皿には手捏ね成形(第5図Ⅰ05，図版5)，型入れ成形がある。麻布圧痕のある皿(図版5－Ⅰ08)はつい最近まで京都市幡枝において製作されていたものと同じである。小盤は，径15～22cmで，高さ約2.5cmの円形の器で，底部に板の圧痕がある。体部は丁寧に撫で調整を施している(第5図Ⅰ01，図版5)。

塩壺(第6図)は蓋と身が出土している。蓋(第5図Ⅰ02)は外径約8cmで，内径は6～7cm内面下端まで布目があり，内型を用いて成形している。身は受部をもつもの(第5図Ⅰ04)と，もたないもの(第5図Ⅰ03)がある。Ⅰ04は受部の口径6cmで，体部内面にだけ布目があり，体部を内型を用いて作った後に底部をはめ込んでいる。Ⅰ03は口縁の外径5cmで，体部と底部の内面に布目があり，内型を用いて一度に身を作っている。Ⅰ04には，最後の文字が「因」か「天一」と読める刻印がある。そのほかに，ろくろ成形による円筒状を呈す鉢(図版5－Ⅰ09)や，口縁下3.5cmぐらいまでが直立し，底部へ向けて体部がすぼまり丸底になる盤(図版5－Ⅰ10)



第5図　溝SD1出土の土師器



第６図　溝 SD1 出土の塩壺

などが出土している。

陶磁器　　輸入磁器，中世陶器，近世陶磁器が出土した。輸入磁器は鎌倉時代の中国製灰白磁(図版５－Ⅰ11)，中世陶器は鎌倉時代の常滑の甕，室町時代の備前のすり鉢(図版５－Ⅰ12)などである。

近世陶磁器は伊万里(図版５－Ⅰ13～17)，唐津(図版５－Ⅰ18･19)，伊賀(図版５－Ⅰ20)，信楽(図版５－Ⅰ21)，備前(図版５－Ⅰ22)，美濃，京焼(図版５－Ⅰ23～26)である。すり鉢は信楽がやや多く，残りは備前，椀は京焼，伊万里，唐津の順である。Ⅰ15～21･23～26 は SD1 から出土した。

瓦　器　　井戸 SE1 出土の羽釜１点で，鍔は小さく，体部から鍔の上 1cm まで煤が付着している。江戸中期頃であろう。

土製品　　SE1 から完形の塑像の地蔵菩薩像(図版５－Ⅰ27)１体が出土したほか，黒色土層と暗灰色土層から泥面子と伏見人形(図版５)が多く出土した。

瓦　類　　瓦と塼が出土した。軒瓦は立合調査で巴文軒丸瓦(図版５－Ⅰ29)，発掘調査でも巴文軒丸瓦(図版５－Ⅰ28)が出土した。両者とも平安後期である。塼(図版５－Ⅰ30)は４隅に焼成前穿孔があり，櫛描き文を施したもので，江戸末～明治時代のものである。

４　小　結

発掘地域は，昭和51年に発掘調査を行ない，平安後期の多数の遺構を検出した京大病院遺跡 AE15 区の北東約 200m の所にある。今回の調査によって明らかになった当地の土層と遺構の方位や埋土は，基本的に AE15 区と同一であり，両地点を同一の遺跡内と理解して今後の整理を進めるつもりである。

江戸時代の遺物は，かなりまとまった資料が SD1 から出土しているうえ，江戸中期頃以後明治時代までを３層に分層できたことから，ほかの遺跡の資料と合わせ，土器の年代と種類による供給地の変遷を辿ることができそうである。

集石遺構の性格については，SX4･5 と SD1 を一連のものとすると，汚水溜のような機能を考えることもできる。今後の遺跡調査の結果を待ちたい。